

意見

八巻和彦

少しアカデミックな書物において、「知識」でも「科学」でも「学問」でもなくて、「知」という日本語を用いることで、何らかの不足を補い新たなことを表現しようという動きが現れたのは、20年くらい前からのことのように思われる。その意味では、日本でも「知のあり方の変容」が始まっているのだろう。（ちなみに、最新版「広辞苑」にも、上のような意味での「知」の使用法は示されていないことから、この用法の新しさが傍証されるだろう）。

さて、私がお尋ねしたかったことは、現代のこのような状況を意識しつつ、シンポジウムの提題者たちが、「知のあり方の変容？」という副題で用いられている「知」を扱うに際して想定している「知」とは、SapientiaなのかScientiaなのか、それともその両者を総合したものなのか、そうである場合には、その両者の関係はどのようなものであると考えておられるのか、という点であった。

必ずしも常に峻別されていたわけではないが、中世の学問探求の場ではSapientiaとScientiaが区別されており、キリストがSapientiaという別名をもつことが示す布置においてSapientiaが優位にたつものとされていた、と言えるだろう。これは、中世末期に位置するニコラウス・クザーヌスの以下のような主張が明瞭に示すところである。すなわち、彼は1441年の年頭の説教で、ピュタゴラス、ソクラテスそしてキリストの名を挙げながら、彼らは何も書き残さなかったが、その理由は、Sapientiaについては、書いたとしても伝えることができず、むしろその卓越性を隠すことになるからだ、としており、さらに1450年の一連の著作『無学者篇』では、Scientiaのみを追い求める弁論家を無学者idiotiaが批判して、その背後にあるSapientiaをこそ求めるべきだ、と論ずる場面を描写しているのである。ここには、15世紀にすでに、SapientiaからScientiaを切り離して、後者のみを探究してもよいとする傾向が学問の世界に現れていて、それをクザーヌスが批判しているという状況を読み取ることができるであろう。

このような流れは、クザーヌスらの批判にもかかわらず止まることがなく近世へとつながって行き、ScientiaがScienceとして堂々たる自己主張をすることが許される

事態が成立することになったのではないだろうか。

この点は、「知的探求の世俗化 Secularization」のプロセスともとらえることができるものであり、さらには近代における「学問探求の高度な制度化」の結果としての近代国家における大学という学問探求の場の在り方——哲学も含めてどの学問にも Science になろうとする競争と Science だと自称する流行が生じた——とも密接に関わっていると言えるだろう。

そして時代はさらに下がって、「Science の自由」のなかで人類の存続さえも危ぶまれるような状況に立ち至っている。昨年 9 月にローマ教皇がレーゲンスブルク大学でした講演「信仰、理性、大学」において、近代以降の「理性」概念の自己限定に警鐘を鳴らして、理性概念と理性の使用の拡張を提唱したのも、Sapientia と Scientia の関係如何を問うているのに違いない。その意味で、これはすぐれて現代的問題でもあると考えられよう。

意見

桑原直己

司会の川添氏は、近代哲学の代表的人物は「大学人」ではなかった、という事実を指摘された。この点に関連して、注意を喚起すべきと思われる一点を指摘しておきたい。それは、中世から近代にかけて「大学」そのものが変質した、という事実である。

加藤氏が暗に言及しかけたと思われる「自生の大学」と「創られた大学」との対比にはきわめて重要な意味がある。中世においては「自生の大学」——さらには大学が外部の地域権力と闘争した結果成立した「大学の自治」の金字塔ともいべき「移住による大学」——こそが大学の本来の姿を示すものであった。中世という政治的に多元的であった社会において、「知識人のギルド」たる大学が自ら一個の独立した政治的勢力として「自生」した。ここに本来の意味での大学の原点があるように思われる。まずそれは、伊藤氏が引用されたル・ゴフが「きわめてはっきりした身分」として言及する「知識人」概念が成立する基盤であった。彼らは大学の「教師」としての「思索と教授」という明確な社会的役割を担っていたがゆえに、同業者組合としての大学に結集しえた。また、大学は坂部氏がヴォリンガーらに託して中世音楽の「多声